

正本写『松栄千代田神徳』の一資料

A study about an illustrated outline book written about program
"Matsu-no-sakae Chiyoda-no-shintoku" of Kabuki staged in 1878

山本和明

はじめに

かつての芝居見物は、「芝居茶屋」を介して行くのが一番贅沢な方法だった。

茶屋で朝飯をした、める人たちも珍らしくはない。芝居では着到の太鼓を打つてゐる。茶屋の二階で着到の太鼓を聴く気分は芝居好きにとつて実に堪らなく嬉しいものだつたさうである。充分休憩したのち、茶屋の若い衆に案内され、茶屋の客に限られる紅白の緒の草履をはいて芝居に入る。それも鼠木戸からではない、特別な広い入り口があるのだ。茶屋の客が行くのは、棧敷か高土間といふ高級な席にきまつてゐる。(略)若い衆は、左手に持つてゐた赤い毛氈を、穴番に割り当てられた座敷へ敷き、蓆ふし盆ぼんには「絵本」と「紋番附」と「鸚鵡石」とが挟んである。

渥美清太郎の随筆『歌舞伎大全』（昭和十八年四月・新大衆社、十七頁）の一節である。この記述がなされた昭和

十八年当時、大阪の道頓堀などにはまだ残っていたものの、芝居茶屋を通じての観劇法は東京では消滅していたと言う。今回紹介するのは、そうした文化が東京でも色濃く残っていた明治十一年（一八七八）、恐らくは若い衆が煙草盆に挟んで客人に渡した、そんなことを想像させる一書である。

演目の「松栄千代田神徳」は、西洋建築新富座の開場式の余韻を受け、明治十一年六月十日から七月二十一日まで上演された。徳川家康の前半生のエピソードを綴った二代目河竹新七（後の黙阿弥）による「活歴」で、近代歌舞伎の大きな転換点とも位置づけられた演目である。その正本写に二種あることは、既に拙稿で述べている（『正本写「松の栄千代田の神徳」の周縁」国文学研究資料館紀要第三二号・平成十八年二月）。紹介する資料はそれとは別に、拙稿執筆以降新たに見いだしたもので、石川巖『明治初期戯作年表』、山口武美『明治前期戯作本書目』、渥美清太郎『歌舞伎小説解題』（早稲田文学二六一号）にも確認できない。その紹介旁々、先の拙論の補いたいと思う。

資料 一 瞥

まず、今回紹介する「松栄千代田神徳」（以下、区別するために「新出本」とする）について、簡単に書誌的な事項を記しておきたい。本書の翻刻は後に掲載している。

まつのさかえちよだのしんたく

松栄 千代田神徳

- ①書名は表表紙題による。見返しでは「松の栄千代田の神徳」。
- ②ジャンル書型等 正本写。縦十七・五糎×横十一・七糎。一冊。
- ③刊行年 明治十一年六月十四日御届（奥付による）。

- ④ 作者名・画工等 守川周重（音次郎）筆画（表紙ならびに奥付による）。
- ⑤ 序跋 ナシ。
- ⑥ 出版人 市川かね。
- ⑦ 柱題 「おくがは」
- ⑧ 構成 摺付表紙、見返し、「俳優連名」半丁、口絵一丁、本文八丁半、奥付（劇場茶屋名）、後ろ表紙。
- ⑨ 所蔵 禾口庵文庫。

新出本の特徴として、一冊物であること、巻頭に「俳優連名」が掲げられていること、奥付に芝居茶屋の名があがっていること、漢字仮名交じりの文章であることが指摘できる。

「松栄千代田神徳」の正本写については、上演と同時に競争的に公にされていた錦栄堂大倉孫兵衛版ならびに山松堂山村金三郎版があった（前掲拙稿参照）。前者は仮名垣熊太郎編、久保田彦作序、蜂須賀国明画。後者は篠田仙果録、同序、揚州周延画。ともに上中下巻三冊である。序文も有し、奥付には出版広告があることなどから、ともに書肆を通じて売り捌かれたものであった。その点、今回紹介する新出本とは異なっている。今回の新出本は、おそらく奥付に茶屋が名を連ねていることから、芝居茶屋で主導でつくられた「絵本」と目される。渥美清太郎の見解に従えば「菊半折ぐらみな小版でして、絵ばつかりの説明で、側に極あらつばい配役がついてる」たものを「絵本」とするが（渥美前掲書七六頁）、明治の頃には様々な試行錯誤がなされていた。以下、岡本綺堂の随筆から一例を紹介しておこう。

むかしは番附のほかに絵本というものがあつた。つまりは番附を書き直して、幾枚かの小さい綴本にしたもので、劇場内で用いる番附は皆この絵本に限られていた。普通の一枚刷の番附では大きすぎて不便なためであろう。

したがって一枚刷の番附は前にいったように芝居茶屋や出方が客さきへ配るか、又は辻番附と唱えて市内の辻々や湯屋髪結床などへ広告用に懸けて置くだけのことで、芝居見物に行った場合には、別に彼の絵本をうけ取るこ
 とになつてゐた。

絵本の特色は、狂言の名題や役割以外に、狂言作者や、チョボの浄瑠璃を語る太夫や、長唄の一座や、それらの連名を記入してあることで、普通の番附には狂言作者の名などを記さないのが例である。(略)その絵本は江戸時代から明治に至るまで継続してゐたが、活版がひろく行われるに連れて、明治十五年頃から筋書というのが新たに発行されるようになった。それは文字通りに、狂言の筋書を簡単に書いて、彩色の似顔絵の表紙を附けたものである。しかも従来の絵本が廃止されたわけではなく、番附のほかに絵本と筋書が暫く相並んで行なわれていたのであるが、何といつても絵本と筋書はやや重複する嫌いがあるので、絵本はいつか衰えて筋書のみが行なわれるようになった。

(旺文社文庫版『明治劇談ランプの下にて』「番付と絵本」五〇―五二頁)

「明治十五年頃」のことと記されているが、活版主流になる以前の段階からおそらく試行錯誤は起こつてゐたのではないか。巻頭の「俳優連名」や本文中の「目出度語ふて幕」「道具廻つて」「薄ドロくゝにて道具替」といった表現、さらに末尾の「千歳万秋大々叶」との寿ぎの言葉で閉じている点も含めて、単独の読み物と言うよりは鑑賞の補助としての側面を持つていよう。構成上、一冊物十丁仕立という点でも、一冊九丁三冊物であつた他二種「松栄千代田神徳」とは異なつて位置づけられる。このような体裁が、新出版には備わつてゐる。

ところで、奥付に連なる茶屋の中で「東側之分」にある「菊岡」は、綺堂の随筆にも登場する有名な芝居茶屋であつたと思ひ。

新富座見物のことは私もたしかに記憶している。その日は三月の九日で、時間まではさすがにおほえていないが、何でも朝飯を食つてしまうと、早々に着物に着換えさせられたのを思うと、おそらく午前八時頃から繰り出

したのではあるまいか。(略) ゆき着いた芝居茶屋は菊岡という家で、わたしはここで袴を脱がされた。父は最初から袴を穿いていなかった。

茶屋の若い者に案内された場所は、西の棧敷であることを後に知った。狂言は―これも後に知ったのであるが―一番目「赤松満祐梅白旗」中幕「勸進帳」二番目「人間万事金世中」で(略)小屋の表には座主や俳優へ寄贈の幟がたくさん立てられて、築地の川風に吹かれている。座の両側にも(山本注―大東出版本には加えて「向う側にも」あり)芝居茶屋が軒をならべて、築地橋から座の前を通りぬけた四つ角まで殆どみな芝居茶屋であった。(前掲書「新富座見物」二二―二五頁)

ここに言う新富座両側に「軒を並べた芝居茶屋」は、そのまま奥付記載の「劇場茶屋」に「東側之分」「西側之分」として記載される茶屋に他ならない。その記載のあり方から当時の茶屋の格式をもうかがい知ることのできる資料となっている。

補記として

さて、内容に立ち入って考えてみる。拙論を踏まえ、特に二点ほど補っておきたい。まずその表記について。拙稿にて、錦栄堂大倉孫兵衛版の正本写について述べたが、その中で次のように触れた箇所がある。

今回考察の『松の栄』は、正本写における漢字かな交じりルビ附の魁であるが(渥美清太郎「歌舞伎小説解題」)、その大倉屋こそが漢字振り仮名付きのいわゆる「明治式合巻」を生み出した『鳥追阿松海上新話』と同じ刊行書肆であることに注目して良いだろう。以後、正本写は、他の書肆刊行のものも、多くルビ付に変わって

くわけで、「松の栄」刊行が一つの契機となったことは間違いない。

(拙論二〇二頁)

「漢字振り仮名付き」という点では新出本も同様である。拙論にて触れた渥美清太郎「歌舞伎小説解題」では錦栄堂大倉屋孫兵衛版「松の栄千代田神徳」について、「同年新富座上演、黙阿弥同名題の狂言を綴る。仮名垣魯文編、峰須賀国明画、錦栄堂版。挿絵(山本注―正本写本文のこと)にある通り、この時からルビ附の字になった」と表現していた。錦栄堂版の奥目録によれば、明治十一年六月五日に出版御届がなされ、新出本は十四日御届と、その先後関係は変わらないものの、「正本写における漢字かな交じりルビ附の魁」として大倉屋孫兵衛版を位置づけた点は、新出本の出現によって少しトーンを下げなくてはなるまい。勿論、この時期にその文体の転換がなされたことはそのまま許容されるのだろうか。

次に確認しておきたいのは審使への命名のことである。拙論では次のように述べていた。

意外なことに同じ演目を素材としながら『松の栄』と山松堂版『松栄千代田神徳』とは同じ配役でも役名が全く異なっており、『松の栄』では「修験者玄敬」、山松堂版では「かうしうのまはしもの快典」とあり、挿絵にも「快」の字が刻まれている。歌舞伎「松栄千代田神徳」は、『三河後風土記』の中からエピソードを抜粋し利用しているのだが、そこでは「玄敬」で登場する。しかし、今日確認できる脚本(黙阿弥全集第二七卷)では「怪典」となっているのである。恐らく上演直前に何らかの事情で名前の変更が行われたと考えるべきか。当時の別の媒体を確認するに、辻番付(国会図書館近代デジタルライブラリーによる)、役割番付(抱谷文庫蔵、資料館紙焼本による)で「修験者減敬」、絵本番付(蓬左文庫尾崎コレクション)、資料館紙焼本による)で「快典」とこちらも齟齬をきたしている。ちなみに「読売新聞」明治十一年六月七日朝刊記事では「武田家の間者玄敬法師」とある。その先後関係については今は指摘に留めておくが(無論、快典を変更後と推定している)、そうした命名変更が直前にあったならば、競合する正本写の制作時期に違いをみることも許されるであろう。

この点、新出本ではどうかというところ、「玄敬といふ法師が」といった表現が丁附記載にいう三丁表に記されている。しかしその一方で四丁表に腕組みする人物は「怪典」とされるのであり、新出本が、錦栄堂版と山松堂版の中間に位置する急ごしらえであったことを思わせる。

内容的には錦栄堂版ほどに演目内容との齟齬は見いだせない。そのことは拙論で触れたように、より一層錦栄堂版の正本写の性急なつくりざまに思いをいたすとともに、演目「松栄千代田神徳」をめぐる正本写三点の競合ぶりを覗かせてくれるのである。

影印と翻刻

以下、禾口庵文庫蔵本の翻刻を掲載する。特に後ろ表紙の側の虫損甚だしく判読できない処も多い。裏打ちの施された新出本の現状は影印にて確認していただけることと思う。出来るだけ解読することに心がけたつもりである。

〈凡例〉

※□…虫損のため判読不能であることを示す。

※（ ） ^ ^ ^ 「 」 / ・ 等の符号…論者による補記

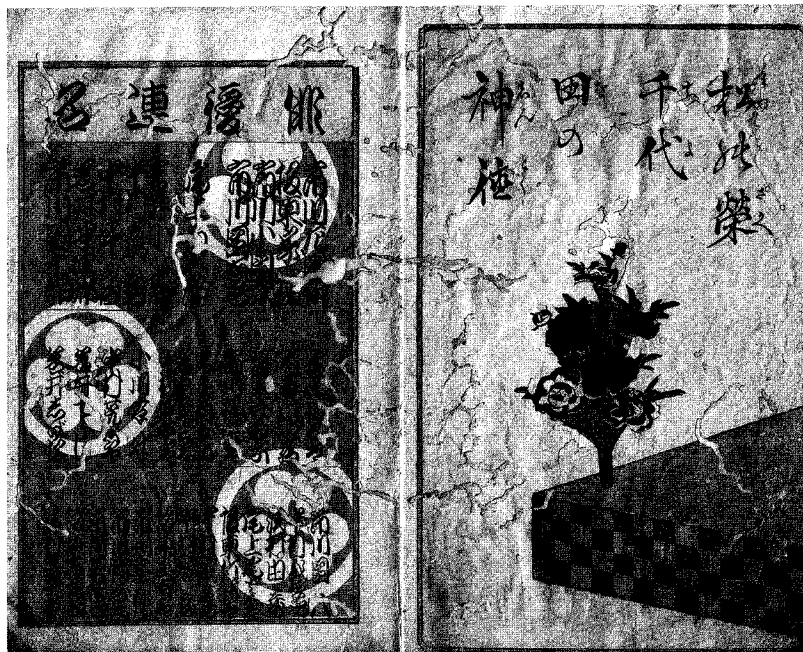
※翻刻に際し、一字下げ・改行は任意に施している。また句読点・濁点も同様。

※読みの順序を示した符号は翻字していない。



〈摺付表紙〉「守川周重筆

松栄千代田神徳」
まつのかみえちよだのしんとく



〈見返し〉

松の榮^{まつ}千代田^{さかへちよだ}の神徳^{しんとく}

〔俳優連名〕／市川左団次・坂東家橋・市川小団次・市川
団右衛門 尾上菊五郎 岩井小紫・中村篤藏・中村仲藏
・岩井半四郎・市川団十郎 尾上梅五郎・大谷門藏・坂
東喜知六・市川猿十郎 尾上菊之助・岩井余三郎・中村
伸太郎 小川幸対・中村荒次郎・岩井てうじ・岩井しげ
松 市川団八・中村成右衛門・沢村由藏・尾上尾登五郎
・坂東竹次郎・中村成藏・中村鳩藏・坂東三太郎・市川
宝作・市川幡右衛門・市川三すじ・坂東等之助・沢村清
十郎（丁付ナシ）



（口絵）信永 家橘／乙□ 半四郎／藤吉 菊五郎／家
康 団十郎／光秀 左団次（1丁表）



序幕 岡崎八幡の場 同陣中大高兵糧入の場

徳川元康に、今川義元から大高の城へ兵糧入の事をたのまれ、こは義元のなんだいと陣中軍議に及ぶ所のほとたん。

二幕目 三州産見村の場

家泰公が鷹野の折から、百姓の権右エ門が沼におち入りこまる所を、手づからひきあげていたはる仁心。道具廻つて、権右エ門が住家の体。家泰公がたちよつて休息に及ばると、娘お方が鹿茶一ツと靴けにさし出す。容貌といひ、爪はづれ鄙には稀なと見初、思ひ入れ。後に至りて此娘がお万の方となる。

三幕目 駿州三保の浦の場

家泰公御殿の場にて、天津乙女が唄浄るりの相方にて、三保の浦辺にあらはれ出、松の根方に光りある玉を見付て手にとる所へ、上手のあし原おしわけて、光秀・信長がうかゞひ寄る見へのうち、天津乙女が、ひきぬきにて(2丁表)



たちまち賤の女の姿となり、互に玉を争つて、先最初には信長がとり、夫を光秀が奪ふ所へ、むかふの揚幕より、此下藤吉が又その中へわつて入り、光秀の玉を取返す。始終だんまりのしうち。折から明神の社のうちより家泰公が立出て、至底其玉をにぎるとき、薄ドロくにて道具替と、家泰公のお居間の体にて、偕は今は夢でありしかと、天下を握る思入にて笑を含むの思ひ入れのところへ、山方山城・柏原小平太・誉田作左エ門おのくきやうゑつとす、み出、君を祝して諸人が、羽衣の舞の手に東遊びのかずくと目出度謡ふて幕。

四幕目 御曲輪内踊遊覧の場

惣座中が出て長唄の惣踊り。中に交つた永見村の弥八郎に信泰が目をつけて、始終は役に立者を武士に取立抱へる一段。折から武田方の間者にて玄敬といふ法師が、家泰の御台築山御前ひそかに密書を参らすれば、うなづく仕打で道具かわると、家泰公の御殿の場にて、御側に伺公の誉田作左エ門に、先日抱へたこし元お万がくわいにんしたは予が胤と謎して夫と知すれど(3丁表)



むかしかたぎの作左エ門ゆゑ、君の詞の解かねる仕うち。さてその幕を引返すと、奥御殿広庭の場で、茲に御台築山御前が、藤浪・はちす・くつわなどいふ局三人に密意を含め、お方をそこへよび出して、誰と不義してくわいにんした白状しやと、せめせつかん。まことは君の御胤ゆへ、夫と白地にいひかねて匿ば、尚も築山御前は、しつとの念のふかきより、おひげの塵取る局等が、ゑんりよゑしやくもあらしく、お方を手ひどい打ちやくのその場へ、誉田作左エ門と鳥居半蔵の二個が出て、お方をさらつてにげんとする。(4丁表)



五幕目 浜松の城大広間の場

彼武田方の計略にて、さきに密書を法印にもたせて徳川家へ送りしことの、はやくも尾張の億長へ聞へ、ぎねんのもとととなりしゆへ、高井左エ門尉を使者として種々弁解に及べども、狐疑深ければ軽く解ず。此上は嫡子信泰に憫然ながらも切腹させ、信長の疑念を晴さんかと、家泰公の御前において蒼田作左工門・鳥取半蔵・山方山城等が居並びて大評定に及びしすへ、余儀なく切腹と決定して、山方・鳥取兩人に此御使を命ぜられ、両士もその座を立兼る。父子君臣の情態を一場にまともて道具廻ると、二股城中の場で、徳川の嫡男信泰が小姓の宮崎主水を捕へ、今朝を取上げし時、あやまちにもせよ予が眉見に傷をつけたる不届な奴手討にすると(5丁表)



きびしい腹だち。まづしばらくと弥八らが出て君を宥むる辞にめんじて、長の暇を取らするも、こは信泰の内心に、はや切腹のお使の来らんことを承知して、いかりに事よせ家臣等に暇をやるというしこなし。程もあらせず山方山城・鳥取半蔵兩人が、家泰公御使とて座には着ども信泰の心のうちを察しけり。いひ出しかねて猶豫を、とくより承知の信泰が、父の慈愛の深かるに、夫に引かへ母築山御前、殊に不仁の信長と、齒をくひしめる遺恨の面色。辞世の一首を詠ぜし上、肌おし脱で覚悟の切腹。半蔵とくく介錯と仰せはあれどきりかねて、我をわする、男なき。斯ては果じと山城が、いたわしなから御首をおもひきつてうちおとし、かへす刀に我とわが髻、弗ときりすて、高野へ登るといふ仕うちにて、すぐ

に此幕を引返すと、以前の大広間の（6丁表）



体になり、首桶か、えて鳥取半蔵しほくとしてたちも
 どり、御前へ直せば、家泰公見れば替りし我子の死顔。
 心で泣けど目になかぬ例の仕打。

六幕目 伊賀越御難の場

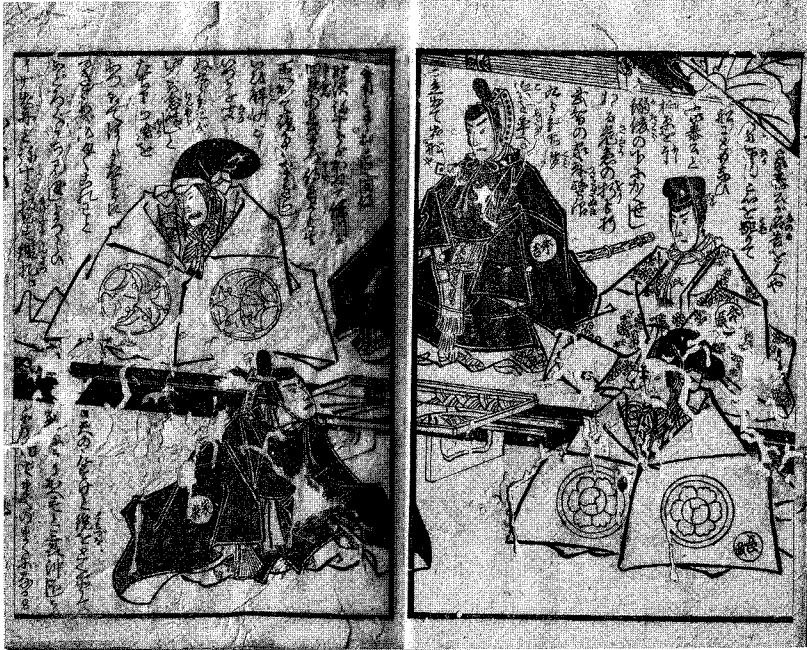
天正十年六月二日、みやこ本能寺において武智のため
 に弑せられたる変により、伏見をたちのく家泰公が、誉
 田平八郎・柏原小平太・近藤伝次郎を召俱して、岩石聳
 ゆる山越に、たゞさへあゆみなやめるを、ゆくさきとく
 に野武士等がおちう人やらぬとさへぎるゆゑ、ほとく
 なんぎにたへかねて、はや家泰の運の究め、自殺するよ
 り外はなしと、既に覚悟と見へたる所へ、折から獵師の
 八蔵が出、御道案内仕るといふに、主従力を得て、(7
 丁表)



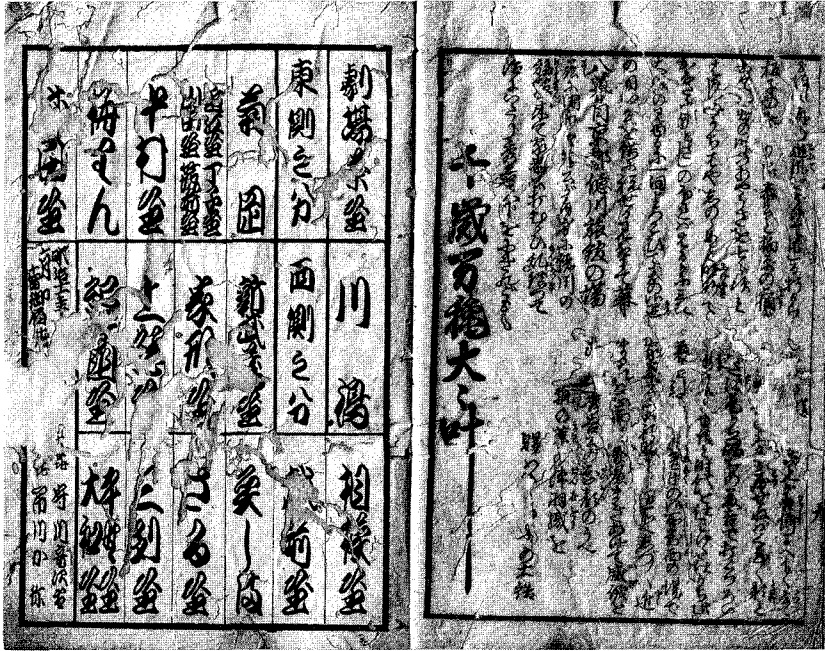
伊賀路を越^こて神風の伊勢の白子へいそぎ行。

七幕目 勢州白子浜迎の場

角屋^{かどや}といふ廻船問^{まわぶねもん}や。ときに戸主^{あうるじ}の七郎次^{しちらうじ}が、母^はのな
 ぎさの眼病^{がんびやう}を厚^{あつ}くいたわる孝子^{かうし}のしこなし。折^まからこ、
 へ柏原^{かしはら}がすがたを参宮^{さんみやう}の同者^{どうしや}に打^うち、家泰公^{けいたう}以下^{以下}従者^{じゆうしや}を
 いざなひ、三州^{さんしゅう}までの便船^{びんせん}をたのむ人躰^{にんたい}かつこうに、さ
 てわと悟^{さと}る七郎次^{しちらうじ}が、かねて武智^{ぶち}の家来^{けらい}等^ら出船^{しゅつせん}はならぬ
 と触^ふれたれど、御^{おん}いたわしき御^{おん}ありさまをたすけんものと
 思案^{しあん}して人目^{にんめ}をいとへば、行燈^{あんどう}をアレ浜風^{はまかぜ}がといひなが
 ら、わざとふきけしくらやみにて心尽^{こころづく}しの母子^{おやこ}がもてな
 し。実意^{じつい}を感じ^{かん}じて（8丁表）



家泰公が名告なつこを、人やれ聞んと心を配りて船にともな
ひ、家泰公と柏原を干鯛俵ほしかたわらの下にかくせし。かゝる危急ききう
の折をりも折、武智の家来鷺沼九郎兵衛、夥兵くみこを率へ立出
て、出船無用ととむる所へ、同役野沢弥十郎がかねて
徳川に旧恩きうおんあれば、まづ待れよと其所へ出て作事にまぎ
らしいひ解とけど、いつかう聞ぬ九郎兵衛が、此上は念暗ねんばら
しとたちまち槍やりをおつ取て、ほしかたわらにつきこめ
ば、いなくこれわとおどろくうち、見通しよろしいイ
ザ出舟と弥十郎投出す鑑札かんじら。天のたすけと纜ともづなをとく所に
て幕になり、かへすと三州沖ほしか舟の場でまへのまく
になる。(9丁表)



ほしか舟の追風おひてをうけてはしる折から、板子の□□り家
 泰公と柏原の二個かたりが出て舟出の時のあやうさを、七郎次
 とはなしのうち、はやしの、めと明行てかなたに朝日さ
 しのぼれば、はるかに三州大浜の見ゆるに、一同よろこ
 びて君の御運の目出度を供に祝せる見取にて幕。
 八幕目 京都徳川旅館の場

茲に関白秀吉公が自身に徳川の旅館へ来て、家泰公打
 むかひ、乱鎮らんしんつて治にいたり、秀吉天下をにぎれど
 も、対顔の席□□貴兄が吾衛にへイ云て□□□の
 大名が屈せねば、くれく頼と□つた後、是から以前の藤
 吉で打くつろい□晰し□□、世話と時代を仕わけた仕う
 ち。此幕を引返すと聚楽の御前対面の場で、家泰公には
 礼服に□御前へしづく進まるれば、正面の御簾まきあ
 げて、威儀を正□□秀吉公の対顔のうへ狐の革の陣羽織
 を賜は□□□ふの大詰。千歳万秋大々叶(9丁裏)
 劇場茶屋／東側之分／菊岡／近江屋・丁子屋・山田屋・
 筑前屋／中村屋／梅りん／武田屋(以上上段)／川嶋／西
 側之分／新武蔵屋／家形屋／上総屋／紀伊国屋(以上中
 段)／相模屋／越前屋／美しま／さる屋／三州屋／平野
 屋・大和屋

明治十一年六月十四日御届

□□□□□□□□□□十八番地 守川音次郎
 出版人 □□□□□□□□□□番地 市川かね
 (以上奥付)



〈後ろ表紙〉